



▲鉛筆の音が響き渡る教室内

問4. 生徒へ勉強を教える際、気を付けていることは何ですか？

一人ひとりの能力に合った学習ができるよう心をかけています。

公文式の教室には、えんぴつの持てない幼児から、大学生までの教養課程までの教材があります。年齢や学年にこだわることなく、個人別・学力別に、その子がスラスラ一人で解けるプリントからスタートします。その子にあったスモールステップの教材を、必ず100点になるまで繰り返ししながら進めることによって、やがて、学校で習っていないところも、どんどん一人で解き進められるようになります。

「公文で、「やった!」「できた!」という成功体験をたくさん積ん



▲2学年以上先の教材へ進級した生徒へ「教材進級賞」が贈られる様子

問5. 生徒へ勉強を教えている中で、やりがいを感じる時はどんな時ですか？

で、高い基礎学力とともに、集中力や根気、チャレンジ精神などの気持ちの能力をはぐくみ、自己肯定感の持てる子に育てていきたいと思っています。

子どもたちが新しい教材を解く時や、ミスを訂正する時、教材中のヒントや私からのヒントをもらい、じーっと考え、「あっ、そうか! わかった!」とつぶやく瞬間があります。自分で答えを見つけたり、やり方を理解した瞬間の子どもの表情は最高で、その瞬間が大好きで、とてもやりがいを感

問6. 生徒へ勉強を教えている中で、印象深かったエピソードは何かありますか？

教室開設当時、小学6年生と小学1年生の姉弟に出会い、お姉ちゃんは脳に障害を持っていました。当時、支援学級がその学校になく、小学校入学までに、せめて自分の名前を書けるようにと言われ、親子で泣きながら練習をしたそうです。なかなか覚えられないお姉ちゃんの横で、2歳の弟が先にひらがなや数字を先に覚えてしまったそうです。

そんな二人が、公文式教育で見事にそれぞれの能力を伸ばしてくれました。

お姉ちゃんは、わかること、できることに出会い、日々学ぶ喜びに満ちあふれ、一日中でも公文の教材に取り組みました。中学2年生からは養護学校に転校しましたが、そこでは優等生だったそうです。

また、下の子は乳幼児期に、お姉ちゃんのおかげで言葉と数の刺激を受けかしい子に育ったため、小学1年生の9月から公文を始め、小学2年生の頃に中学の教材を、小学6年生の頃には高校教材の最終教材を修了しました。

この二人から、公文でならどんな子でも、その子の脳力にあわせて能力開発ができることを教えてもらいました。この体験は、その後の私の財産になっています。

問7. 最後に、今後の目標等があれば教えてください!

今、日本全国では少子化が進んでいます。福島町の少子化も本当に大変です。31年前、福島小学校には児童が530名いましたが今年79名だそうです。

そんな中、福島に生まれた子どもたちは、親にとっても、福島町にとっても、日本にとっても貴重な子宝です。

そんな大切な子どもたちが自分の夢を見つけた時、その夢を実現できるように。未来をたくましく自分の手で切りひらき、この世界のどこに行っても、自分の人生を楽しみながら謳歌できるように。私はこれからも公文の教室で、子どもたちの持てる可能性を伸ばし、人生の土台作りを応援し続けていきます。そして、お母さま方の楽しい子育ての応援も応援し続けます。福島町の皆様、これからもどうぞよろしくお願ひします。